# 遺跡の宝庫、城山の裾野を掘る

問い合わせ　生涯学習課文化財担当　☎31-9066

芦屋川の上流には、六甲山地の前山の中でひときわ目立つ鷹尾山（標高261.2m）があります。16世紀代の中世山城である鷹尾城跡が存在することから、通称「城山」と呼ばれ、市民や芦屋を訪れるハイカーたちに親しまれた存在です。

今年は、この城山の山裾で開発事業に伴い大規模な発掘調査が続きました。今年度の文化財保護特集では、その成果を取り上げてみたいと思います。

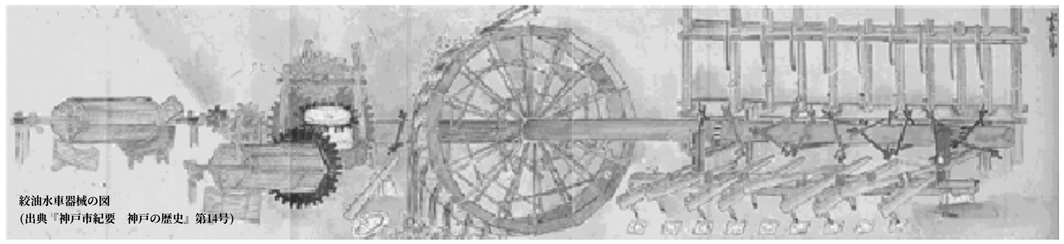
## 地場産業を支えた芦屋川水車場跡

## 市内初、芦屋川水車場跡の出現

### 六甲山地南麓の水車と産業の歴史

芦屋市南麓では、江戸時代中頃(十八世紀頃)から急流を利用して数多くの産業用水車が、機械力がない時代の動力源として活躍していました。当地域では、水車の生み出す動力で多数の杵や石臼を動かして、照明用灯油である菜種油絞りや、灘の酒造用の精米等が盛んに行われていました。

また、明治から大正時代には地元の名産品であった「灘目素麺」の原材料となる小麦粉を挽くこともありました。しかし、大正から昭和にかけて、動力の近代化の波に追われ、急速に衰退しました。



絞油水車器械の図
(出典『神戸市紀要　神戸の歴史』第13号)

### 発掘でわかった芦屋川水車場跡

今回発掘された水車場跡は、大正時代まで稼動していたもので、築かれた時期は、江戸時代まで遡るものと推定されます。

ここでは、水車が設置されていた滝壷、水車に掛けられた水を滝壷から排水する暗渠、半地下式の作業部屋などが確認されました。

滝壷は、割石や古い石臼(搗臼)を組んで、平面が長方形、縦断面が逆台形になるように築かれた施設で、長さ約六・二m、幅約〇・八五m、深さ約二・七mの巨大なものです。

ここに設置されていた水車は残っていませんでしたが、滝壷の大きさから推定すると、その直径は五m前後と考えられます。

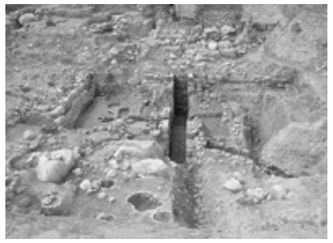
この巨大な水車は、建物の中で回っていました。

排水用の暗渠は、滝壷の東壁南部に石組の入り口を設けて、そこから東方へ伸びていました。

半地下式の作業部屋は、滝壷の西側に設けられており、その大きさは、東西方向約三・六m、南北方向約五・四m、深さ約一mです。作業部屋は建物に覆われており、柱穴や石臼を据えた穴も見つかりました。

出土遺物の中には、石臼(搗臼・挽臼)をはじめ、水車場に関連するものが認められました。

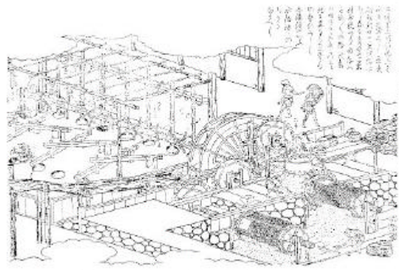
今回の発掘では、絵図に出てくる水車場が現れ、地場産業の歴史を振り返る上で大切な情報が得られました。



水車場全景(南東から)

水車場滝壷

暗渠入口の石組(石臼を転用)



水車による粉挽きの図(出典『都市名所図会拾遺』)

旭塚古墳全景(手前に旭塚、後背に城山を望む)

## 古墳時代終末期巨石墳の旭塚

旭塚古墳遠景
(北西から)

# 旭塚古墳を含む群集墳

### 古墳時代終末期の巨石墳　旭塚古墳

この古墳は、古墳時代の終わり頃(七世紀前半から中頃)に築造されたと考えられています。大型の横穴式石室を墓室とし、兵庫県下で確認されている数千基の横穴式石室墳の中において屈指の大きさを誇ります。

石室を覆う墳丘の高さは、現状で三m程です。現段階では外護列石(古墳の周りを石で囲む構造)の配置状況や遺存状態から方墳の可能性が高いことが指摘されています。また、石室(被葬者を埋葬する部屋)の天井石は残っていませんでした。江戸時代以降に、石材として持ち出されたのかも知れません。石室の側壁に、矢穴痕と呼ばれる石採りの痕跡が確認されています。

石室の主軸は、真北より二十八度西に傾き、南南東に入口を開いています。この開口部から墳丘を眺めると、後背にそびえる鷹尾山山頂が墳丘とちょうど重なり、より一層神秘的な風景を感じさせてくれます。羨道部(入口から玄室と呼ばれる遺体を埋葬する奥の部屋までの通路)の長さは六mで、羨道部を通り玄室に至ると、両側に少し広くなります。このような形態を持つ石室を、「両袖式石室」と呼んでいます。

開口部から奥壁までの長さは十一mを超えます。石室に使用された石材は、一m大の巨石をたくさん用いていることも、古墳築造の技術や年代を知るうえで、貴重なデータとなっています。

石室や外護列石に使用された石材は、いずれも六甲山の基盤岩である六甲花崗岩です。

古墳内部(開口部から)

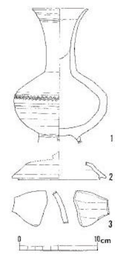
### 周辺調査で盟主さらに裏づけ

これまでに出土している遺物は豪壮なものです。窯を使って焼いた須恵器と呼ばれる灰色の土器で、壺や杯と呼ばれる器種数点と鉄鏃一本がありました。馬具などもあったようで、現在、京都大学文学部考古学研究室に保管されています。古墳の被葬者(埋葬された人)は、この地方の有力な豪族で、おそらくこの群集墳を形づくっていった氏族の指導的な立場の人物であったと考えられます。

先の調査から約四十年を経て、本年度は、旭塚古墳を含む敷地全域の埋蔵文化財の遺存状況を確認調査しました。旭塚のまわりにはまだ知られていない古墳があるようで、副葬品などの一部が点在していました。群集墳は、今から千四百年前の古墳時代後半期の社会構造や親族構造、氏族関係を解き明かす有力な考古資料です。

芦屋の先人たちの足跡を尊び、伝えていけるか…。現代に生きる私たちの課題と思われます。

遺物実測図




(武庫川女子大学考古学研究会報告書から)

遺物が発見されたときの様子(指を指しているあたりに遺物を確認)

## 市制施行50周年記念写真集「芦屋のうつりかわり」を頒布

### 写真でみる芦屋の歴史

市制施行50周年(平成２年11月10日)に発行した記念写真集「芦屋のうつりかわり」の在庫本を、行政情報コーナー(市役所北館１階)、ラポルテ市民サービスコーナーで頒布しています。

「芦屋のうつりかわり」
21.6×30.5cm／135頁／
紙表紙・銀箔押し(ハードカバー)
頒布額　500円

会下山遺跡と触覚模型

問い合わせ　広報課　☎38-2006



## あしやの民話⑥ カラス塚の神事

●文・あしや民話の会
●絵・竹本温子さん

カラス塚の神事が、山のあしやの村で、子どものまつりとして行われておったんは、そんなむかしのことやない、さあ、明治のころまでやったんやろか。

そのころのあしやは、農家が多かったんで、作物がたくさんとれるように、神さんにお願いをしとった。カラス塚の神事も、その一つや。

毎年、七歳から十三歳までの村の男の子がこのまつりに出ることになっている。その中で、年かさの男の子がまつりの大将にえらばれた。

今年は、村の年寄りが、十三歳の太助を大将に選んだ。

太助の家に、年末のある日、男の子たちが集まってきた。

夜中の二時になると、はたを先頭にして、全員水車谷に向こた。

「トーカラ、トーカラ、山の神のサイデンボウ」

そう、大声でさけびながら村の道を歩いていく、まっくらの道を、とっとととっと歩いていく。

水車谷について、一軒一軒水車小屋をまわり、石うすの底に、残った粉米をもらう。

それは、男の子たちのまつりにかかせないダンゴの材料になる。

年が明けて、正月四日、今度は、お年寄りたちが、山の神の境内をきれいにそうじをする。

そしてお酒、おかし、子どもらが集めた粉米で作ったダンゴ(そのダンゴは、みそをまぶしたもの)がお供えされる。

さあ！　いよいよカラス塚の神事の始まりや。

はだかにはだしの男の子たちは、お年寄りからダンゴを一つずつもらい、それを口にくわえ、城山のふもとのカラス塚へひた走りに走る。

男の子たちは、走り出すまでが大へんや。

寒い風が吹いたり、くもりの日やと、ふるえる子が多かった。

それでも、ダンゴを口にくわえると、しゃんとしよる。

男の子たちは、この日はカラスになるのや。カラスは、ふだん、えんぎが悪い鳥やとか、きもちが悪いとかいわれているが、きょうだけは、カラスになった男の子が神さんのおつかいなんや。

カラス塚までやってきたら、カラスになって「カア、カア」と手を広げ、小高い塚を三回まわり、そのダンゴを、山の神さんに、お供えをするのや。

カラス塚から帰るときは、ダンゴをざるに入れてもらい、それを口にくわえて境内まで帰ってくる。

そして、山の神さんのまわりをまわってダンゴをお供えし、神事はすべて終わることになる。

神事がすんで、一番ほっとするのは、このまつりに加わった子どもたちや。境内のどんど(たき火)へとんでいき、待ちかねた配られた熱いぞうにをフーフーと息を吹きかけて食べる。

これで、まつりのいっさいが終わる。

大将をつとめた太助は、ぶじに神事が終わって喜んだ。

どの子も同じで、カラスが子どもにもどり、大きな役目を果たしたという、うれしさがどの子にも、あふれていた。

一年で一番寒いころに行われるカラス塚の神事に、参加する子どもらの体が案じられるが、だれひとりかぜをひかないのは、ふしぎなことや。

山の神がおられるカラス塚に供えられたダンゴは、本物のカラスがごちそうになるのやろか。

とにかく、供えられたダンゴが、早くなくなれば、その年は豊作まちがいなしで、村人も喜んだそうな。

山の神は、冬は山におられ、山を守られ、春になると山からおりて田の神になり、田を守られるという。

そのころの子は、カラス塚でこんなことをして、自分の心や体をきたえたのかもしれない。

そしてそれは、子どもたちにとって楽しいまつりであったことに、まちがいない。

●「あしやの民話」は、芦屋に語り伝えられていたお話を、三好美佐子先生をはじめ、民話を研究するグループの皆さんが収集整理して、やさしく民話の形に整えられ、平成十一年に発行されたものです。